

覚えよう、話をしよう、仲良くなろう、そんな気持ちで歩き回りました。ご近所の知り合いから始まり、少しずつ活動エリアを広げながら、「何かあったら、お声をかけてくださいね」と、自らをPRして回ったのです。

ちょっとした手助けでも、「ありがとう、助かったよ」と言ってくださる方もいました。その反面、「民生委員なんだから、助けてくれるのが当たり前でしょ」といった態度で接してくる方もいて、「世の中には、いろいろな考え方の人がいるものね」と思ったものです。

これまでも、幅広く人付き合いをしてきたつもりですが、あらためて民生委員という立場で人と接するとなると、また違った一面を垣間見ることもあったのです。

一人の女性との出会い

活動を始めて半年ほど経った頃、担当区域内で一人暮らしをしている小林ハツエさんという 85 歳の女性と出会いました。

その地域の近隣の方と立ち話をしていた時、「そういえば、あそこのお宅、一人で暮らしているんだけど、足腰も弱って外出もままならなくなっているみたい」といった情報を教えてもらったのです。

取るものもとりにあえず、その近隣の方に紹介していただき、小林さんのお宅を訪ねてみました。

小林さんは一人暮らし。夫とは5年前に死別し、ご自身も持病のリウマチが悪化して、外出もままならなくなっていました。週に一度、ホームヘルパーには来てもらっていますが、あとは自力で生活をしたいと願っているようでした。

当初は、警戒心もあったのでしょうか。小林さんは「自分でできますから」と、なかなか心を開いてはくれませんでした。

でも、それからというもの、週に数回、買い物途中などにお宅に立ち寄り、声をかけるようにしてみました。心が氷解していくというのは、こういうことをいうのでしょうか。ひと月ほど経った頃から、「鈴木さん、いつもありがとうね」という感謝の言

葉を聞かせてくれるようになりました。私にとってかけがえのない言葉、「ありがとう」を聞いたことから、それまで以上に小林さんを気に留めるようになっていきました。

女性からの切なる願い

出会って3か月ほど経ったある日、小林さんから「家の中のゴミすら表に出せなくて困っている」という話を聞きました。

私は「そんなこと、私に言ってくださればいいのに」と、二つ返事で引き受け、二日に一度はゴミを出す役目を引き受けるようになりました。そんな私の姿に気をよくしたのか、小林さんは「あなたの好きなものでいいから、夕食を作ってくれない？」と、リクエストをするようになりました。料理が嫌いではない私は、時折食材を買いに出かけ、夕食を作るようにもなりました。お宅にも自由に上がれるようになり、時には一緒に夕食を食べる仲にもなっていたのです（もちろん、主人や息子が遅く帰る時に限っていましたが……）。

とある夜、もう午後 11 時をまわっていたでしょうか。私の携帯電話が鳴りました。小林さんからです。「寝付けない。少しだけでいいから話し相手になってほしい」といった内容でした。主人に断り、お宅に駆けつけました。その夜は安心してくださったのか、すぐに落ち着かれたのですが……。

その後、夜中であっても、小林さんから電話が入るようになってきたのです。私も、その都度駆けつけて、不安な気持ちでいる小林さんに寄り添うようにしたのですが、主人からは「そこまで関わらないといけないのか？」と、苦言を呈されました。

正直なところ、私も困惑し始めていたのです。何か良かれと思って行っていることが、次第に裏目になり始めているような、そんな不安がよぎるようになってきました。

(次頁へ続く)